

解答例

- (1) このことに何ら恥すべき点はないが、これは初心者のピアニストが簡単な旋律をつっかえながら弾くことに何ら恥すべき点がないのと同じである。技能や判断力は時間をかけて少しずつ蓄積されるものであるのだから、それを持たないという理由で若者を非難するのは、まだ師匠になっていない見習いを非難するようなものである。
- (2) (the asymmetry の説明)
年長者のほうが若者より経験が多く、できることが多いということ。
(they later deny の理由)
自分たちと若者の差を認めることは、自身の人生が終わりに近づいていることを認めることになるが、それを受け入れたくないから。
- (3) エ
- (4) しかし、そうした人間になるには、深い自己認識と心の広さが必要であり、それらを養うには非常に長い年月がかかる。そして、ようやくそれができるようになった頃には、何とも皮肉なことに、それを実践する年月がもうあまり残っていないことに気づくのかもしれない。

解説

- (1) 前半部の構文上の最大のポイントは any more than ... の部分である。

There is nothing scandalous in this fact, any more than it is scandalous for a novice pianist to stumble through a simple melody.

これは <not A any more than B> 「A でないのは B でないのと同じだ」の構文であり、<no more A than B> (いわゆる"クジラ構文") と本質的に同じ論理構造を持つ。ここでは nothing scandalous にすでに否定の意味が含まれているため、<not A any more than B> と同じ働きをしている。

クジラ構文では、本来 B の位置には「普通は成立しないと誰もが認めること」を置く。そのうえで A を前に置き、「B が成立しないのが当然であるのと全く同様に、A が成立することもないのだ」と A の不成立を強調する修辞表現である。

この理解をもとに本文を読み解こう。まず、this fact とは直前の文の "the young, almost by definition, possess less experience than their elders" の部分、つまり「若者は年長者と比べて経験が少ない」ということだとわかる。筆者はこのことが恥ずべきでないのは B と同じくらい当然だと言っているわけだから、B には我々がもっと素朴に「そりゃ恥ずかしくないでしょ」と思えることが来るはずである。

ここで for ~ が不定詞の意味上の主語を表していることを踏まえると、B の内容は「a novice pianist が簡単な旋律を stumble through する（つまずきながら弾く）こと」であり、それが scandalous（恥ずべきこと）ではないのは当然だ、と言っていることになる。では、どういうピアノ奏者なら、つまずきながら弾いても恥ずかしくないのが当たり前だろうか。それは当然、演奏経験の浅い人のはずである。このように考えれば、仮に novice という単語を知らなくても、「初心者」という意味が文脈から推測できたはずだ。

では、次に下線部の後半部分を見ていこう。

Skill and judgment accumulate slowly over time; to reproach the young for lacking them is rather like reproaching an apprentice for not yet being a master.

セミコロンは、論理関係を読み手にゆだねる、すなわち、論理関係を訳出の際に文脈に応じて補う必要がある。セミコロンの前後がどのような論理関係となっているかは、その前後を読まないと断定はできないので、最後にどのような訳とすべきかを決めることに注意しよう。

セミコロンの後ろを見ると、文の大枠としては、「reproach することは、reproach するようなものだ」という形になっていることが分かる。reproach という単語を知っていれば、訳出はどうすればよいかはすぐに解決するが、知らなかったとしても、ここでは容易に推測できるはずである。ここにでてくる them は直前の Skill and judgment を指すことを考えれば、技能と判断力がないことを理由に reproach することは、まだ master でないことを理由に apprentice を reproach することのようなものだ、というのがこの部分の意味である。master が skill と judgment を持つ人（＝熟練した人、師匠）と考えれば、当然 apprentice はこれらを持たない人、つまり前半部分で出てきた novice に近い意味だと分かる。実際、apprentice は「見習い」くらいの意味である。すると、ここで言わんとしていることは、「技能と判断力を持たないから若者を reproach する＝master でないことで見習いを reproach することと同じだ」ということである。ここまでわかれば、reproach が「非難する」という意味だということは、分かったはずだ。

さて、「技能と判断力は時間をかけて蓄積する」と「それらが無いという理由で若者を非難するのは、師匠ではないことを理由に見習いを非難することと同じ」という2つの論理関係はどうなっているか。もちろん、前者が理由で、後者はその帰結ということは明らかだから、このセミicolonは「～なので」という意味で訳出するといいたいだろう。

なお、ここまで読めば、下線部の内容は前半と後半で、ほぼ同じことを別の言い方に変えて2回述べているだけだということが分かったであろう。このように、書き手が主張したいことを強調するために、同じ内容を繰り返すというのは、文章を書く上での常套手段である。この和訳の部分でも、そのことに気が付いたら、訳出するのが一気に楽になったであろう。

(2) (the asymmetry の説明)

下線部(b)を含む文は第3段落の冒頭にある。

In ordinary life, people often show that they do understand the asymmetry they later deny.

asymmetry とは「非対称性」、つまり何かと何かが対等ではない関係ということである。では、何と何が非対称なのかを本文を見て読み取ることがポイントとなる。これを特定するには、直前の第2段落の議論に戻ろう（実際、下線部では'the asymmetry'となっているから、この内容がすでに述べられている可能性が高いのである）。第2段落では "the young, almost by definition, possess less experience than their elders" と述べられている。これが the asymmetry の中心的内容である。

ここまで読むと、第3段落にある、子どもが文字を一語一語読もうと苦戦しているとき、大人は微笑みながらやさしく導く、というのも、the asymmetry の具体例を

示していたことが分かる。そこでこれらの具体例の内容、つまりは、子どもができないことを大人はできるという非対称的な関係から、the asymmetry とは、年長者のほうが若者よりも経験が多く、「その結果できることも多いという」という部分まで含意していることに注意して、解答をまとめることにしよう。

(they later deny の理由)

they は people（ここでは年長者の側）を指し、「後にそれ（＝非対称性）を否定する」と言っている。なぜ否定するのか。第3段落の末尾で "The puzzle, then, is why this generosity fades as the child grows older" と問いが立てられ、第4段落でその現象が詳しく描かれるが、理由そのものが明示されるのは第5段落である。

To understand why elders so often forget the very gap that ought to shape their behavior, one must consider a subtler psychological factor.

ここで、the very gap（まさにその違い）とあるのが、the asymmetry の言い換えだと気が付いただろうか。そして、それが次の文で、さらに the difference between oneself and the young と言い換えられていることに気が付ければ、解答の手掛かりはこのあたりにあると見当がついたであろう。

To recognize fully the difference between oneself and the young is to confront an uncomfortable implication: if one has lived much longer, one must also be correspondingly nearer to the end of life.

ここは To do A is to do B（A することは B することだ）の構造であり、コロンによって uncomfortable implication の具体的な中身が示されている。なお、コロンはその前に出てきた部分に関して、説明不足と筆者が感じる部分に、補足を加えるときに使う記号である。実際ここでは、uncomfortable implication の意味が、そこだけ読んでも何のことか読者にはわからない。読者は、何のことかよくわからない、だからコロンの後ろがその説明になっているはずである、と読み進めていかなければならないのである。

さて、この部分に結局何が書かれていたかという点、「若者との差を十分に認めるということは、自分がそれだけ長く生きてきたこと、すなわち人生の終わりにそれだけ近づいていること」を認めることにほかならない、ということである。筆者は、次の文で "Few thoughts are less welcome." と述べ、その結果、 "It becomes tempting, perhaps unconsciously, to minimize the gap in order to avoid the conclusion it implies." つ

まり、おそらく無意識のうちに、その差を小さく見積もろうとするのだ、と述べている。これが *deny* の理由である。

なお、続く第6段落では時間知覚に関する研究（年齢を重ねるほど一年が短く感じられる）が紹介されているが、これは第5段落の主張を補強する傍証であり、解答に必ず含めなければならないわけではない。ただし、この段落の存在は、第5段落の主張が筆者の単なる思いつきではなく心理学的な裏づけを持つことを示しているという点で、本文の論証構造を理解するうえでは押さえておきたい。

(3) まず下線部(c)を含む文を読もう。

Yet this supposed duty rests precisely on the authority of experience that the critic has just finished denying.

ここで *supposed* という語に注意したい。これは「～ということになっている」というニュアンスを持つ形容詞であり、言い換えれば、実際にはそうではないという含みがある。つまり、*this supposed duty* とは「義務だということになっているもの（しかし本当に義務と言えるのか?）」という意味合いである。この一語に筆者の批判的なまなざしが凝縮されている。

では、なぜ筆者はこの「義務」に疑いの目を向けるのか。それが *rests precisely on the authority of experience that the critic has just finished denying* の部分で明かされる。この「義務」が拠り所とする (*rest on*) のは経験という後ろ盾 (*the authority of experience*) であるが、その経験がもたらす年長者と若者との差こそ、批判者自身がたった今否定し終えたばかりのもの (*has just finished denying*) だ、というわけだ。自分で土台を壊しておきながら、その土台の上に立とうとしている——これが筆者の指摘する矛盾である。

この矛盾は直後の文でさらに明確に言い換えられている。

In demanding deference to age while refusing to acknowledge the very difference that would justify it, these critics embody a contradiction ...

「年齢への敬意を求めながら (*demanding deference to age*)、それを正当化するはずのまさにその違いを認めようとしない (*refusing to acknowledge the very difference*)」。否定と行使が同時に行われている、という二重性が本問の核心である。

この理解をもとに選択肢を検討しよう。

Aは「社会が否定するような」とするが、否定を行っているのは社会ではなく批判者自身である。主体の取り違えがある。

イは「経験を若者に継承しようとする意志がある場合以外は認められない」とするが、本文は批判が許される条件を論じているのではなく、批判者の論理が自己矛盾していることを指摘しているものであり、論点がずれている。

ウは「経験という名の権威を自ら放棄してしまっている」とする。これは矛盾の片面だけを述べたものである。本文の要点は、経験の権威を「放棄」しつつ同時にそれを「行使」しているという二重性にこそある。ウにはこの「行使」の側面が欠けている。本問で最も紛らわしいのはこの選択肢であろう。書いてあること自体は嘘ではないが、下線部の説明としては半分しか捉えておらず、結局のところ、説明になっていないため、不正解となる。

エは「自らの経験がもたらす優位性から目を背けながらも、その存在を認めないはずの経験を盾にして、若者に敬意を持って従うよう強いている」とする。「否定しながら同時に依拠する」という矛盾の両面を正確に捉えており、本文の趣旨と合致する。

オは「自らの老いを正面から受け入れた上で、経験に基づいた権威を正しく行使している」とするが、本文の論旨はまさにその逆である。明らかに不適當。

以上より、エが正解である。

- (4) 下線部は2つの文からなる。それぞれ見ていこう。

Yet becoming such a person demands a depth of self-knowledge and generosity of spirit that takes a great many years to cultivate.

まず *such a person* が何を指すかを確定するために直前の文を見よう。

One would hope that more of us might become the sort of adult who helps a child sound out a difficult word, rather than the sort who berates the child for not reading it already.

ここには2種類の大人が対比されている。子どもが難しい単語を読むのを助けてやる大人と、まだ読めないことを叱る大人である(この対比はすでに本文では何度も出てきたことである。だから、*berate* は仮に知らなかったとしても、推測できなければならない)。*such a person* が指すのは前者、すなわち忍耐をもって導く側の大人のことだとわかる。これを踏まえると、下線部の指す内容が明確になってくる。

さて、この文で注意すべきは、目的語 *a depth of self-knowledge and generosity of spirit* の構造である。どちらも、名詞構文として書かれていることに注意しよう。前者は *self-knowledge* が「自分自身の知識」というよりも、*knowledge* が *know* の名詞形であることから、「自分自身について知っていること」と解釈する。そして、その度合いが「深い」ことを *deep* の名詞形の *depth* で表現している。後者は、*spirit* 「心」

が **generous** であること、つまり「心が寛大であること」を意味している。これを踏まえて、この2つは「深い自己認識」と「心の広さ」などとするとよいだろう。なお、この英文では、これらは2つで1セットというように、まとまったものとして扱われている。したがって、後ろに続く関係詞節は、**that takes** となっているものの、これらの両方にかかっていると考えるべきである。もちろん、この関係詞節の意味は「養うには非常に長い年月がかかる」である。「～の年月のかかる深い自己認識と心の広さ」と訳してもよいが、「深い自己認識と心の広さが必要だが、それらは～長い年月がかかる」と訳し下した方が訳文は読みやすいものになる。

次に第2文を見よう。

And by the time we are finally capable of it, we may discover — with some irony — that there are not many years left in which to practice it.

by the time ... は「～する頃までには」。ここでの **it** は前文の内容、すなわち「忍耐をもって導けるような人間になること」を指す。

この文で出てきた **in which to practice it** の部分はあまりなじみがなかったかもしれない。これは前置詞＋関係代名詞＋**to** 不定詞という形であるが、もともと **in which we can practice it** だったものが、SV 部分を **toV** に簡略化したものだを読み替えるとわかりやすい。先行詞は **many years** であるから、「それを実践するための年月」のように訳す。

with some irony (何とも皮肉なことに) はダッシュに挟まれた挿入句である。本文全体の議論は、「年長者は若者に対して忍耐強い導き手であるべきだ」という主張から始まりながら、最後に「しかしそうなれる頃にはもう時間が残っていない」という皮肉で閉じられている。この **with some irony** はその締めくくりの感慨を凝縮した表現であり、訳文中でもこの味わいが伝わるようにしたい。「皮肉なことに」とあっさり処理するだけでも十分だが、この一語が本文の結論部にどういう余韻を与えているかは味わっておくとよいだろう。